長野県立美術館

所在地　長野県長野市箱清水1-4-4　設置者　都道府県（長野県）

DATA

障がいのある方のための特別鑑賞日

2021年度からの継続事業　鑑賞

障害のある方も安心して美術館を訪れることができるよう、休館日に開館し、展覧会を鑑賞していただくプログラム。初めて美術館を訪れる方や美術館に行きづらいと感じる方に向け、美術館体験のきっかけをつくる「場をひらくプログラム」に位置付けられている。

特別支援学校および学級を対象とした出張講座および館内での鑑賞プログラムの実施

2019年度からの継続事業　鑑賞・創造

県内の小・中・高・特別支援学校の児童生徒と先生を対象としたスクールプログラムのひとつ。特別支援学校・学級を対象とした出張講座は学校の意図や希望を聞いてオリジナルプログラムを提供するほか、来館時は、初めて美術館に訪れる子どもたちや団体鑑賞に不安を抱える先生方も安心して来館できるよう、美術館のスタッフがサポートする。

「みる」を考える－見えない人と見える人が一緒にみるために

2022年度からの継続事業　鑑賞

視覚障害のある方とない方が、一緒に展示室で対話による鑑賞を行うプログラム。「鑑賞」と「みる／みえない」ことについて、対話を通して体験する。

※上記の「障がいのある方のための特別鑑賞日」と「『みる』を考える」は、同館が推進するインクルーシブ・プロジェクトの一環。

取材日	2023年12月15日
回答者	青山由貴枝（長野県立美術館　学芸課学芸専門員）

インクルーシブ・プロジェクト

長野県立美術館がインクルーシブ事業に取り組むようになったきっかけや目的などを教えてください。

当館は長野県信濃美術館を2021年に全面改築し、館名も変えて再出発した美術館です。リニューアル前の2000年代半ばから院内学級への出張講座やベビーカーツアー、手話通訳付きの鑑賞会などを開催していましたが、必ずしも定例開催ではなく、リニューアルオープンに合わせてインクルーシブ・プロジェクトとして再整備したという経緯があります。きっかけとして大きかったのは、新しい美術館では誰でも利用しやすい美術館にするための取組を進めるように、という県からの指示でした。その背景には、障害者による文化芸術活動の推進に関する法律が施行され、県でも共生社会に関する条例を準備していたなど、障害者を取り巻く状況の変化があったと思います。

改築工事のための3年間の休館中、新たに松本透館長（元東京国立近代美術館副館長）が就任しました。新館長は、学芸員が手の空いているときに教育普及事業をするのではなく、専門職員が恒常的に担うべきだという考え方のもと、教育普及の専門部署を新設しました。私は一般の学芸員から教育普及の専門職として再任用され、プロジェクトを担当することになりました。休館中にはそれまで行っていた教育普及分野全般の事業を棚卸し、必要なものとそうでないものに仕分けすると同時に、新たに始める事業の検討を行いました。その作業を通じて、誰でも利用しやすい美術館を目指したプロジェクトの形をつくっていきました。

インクルーシブ・プロジェクトの企画はどのようなプロセスで進めましたか？参考にした事例があれば教えてください。

私は教育普及を専門的に学んでいないため、休館中に50館を超える全国の美術館を視察して回り、学校対応から定期的な子ども向けプログラムをどのように行うか、ボランティアはどのように育成するかまでを含めて、たくさんのことを教えていただきました。

特に、京都国立近代美術館が中核館となって進めている文化庁「感覚をひらく――新たな美術鑑賞プログラム創造推進事業」については、ほとんどのイベントを体験しました。プログラム運営の方法を学んだというよりは、障害のある方と一緒に見る体験をしたことに大きな意味がありました。ゴツゴツした茶色の茶器を触って鑑賞するプログラムで、全盲の方に「ここに〇〇って漢字が書いてあるんだけど確かめてくれ」と言われたとき、私はどこに作家のサインが彫られているかわからず、「あなたは目が開いているのに、なんでこれが見えないんだ？」と不思議がられて衝撃を受けました。自分がいかに見ることができていなかったかを痛感し、それをきっかけに、私が見ていた（と思っていた）ものは、本当は見えていなかったのかもしれない、という前提が生まれました。

見る方法は目だけではないという意識は、当館の「ひらくツール」の制作にも繋がりました。その中のひとつ、触地図「ふれる小さな長野県立美術館」は東京都庭園美術館のウェルカムルームにある「さわる小さな庭園美術館」に触発されて作ったものです。

当時は、これから長野でプロジェクトを進めていく立場として、鑑賞や来館者層の幅広さ、また伝え方の多様さなどを学んでいました。このときの経験が現在の教育普及に対する考え方の礎になっています。

本館1階、交流スペース前に設置された「ふれる小さな長野県立美術館」 ©大倉英揮（黒目写真館）

障がいのある方のための特別鑑賞日

この取組はどのようなプロセスで進めましたか？

これはリニューアル時に新たに行うことにした取組のひとつです。まずは東京都美術館の特別鑑賞日に参加し、運営資料も見せていただきました。しかし、東京と地方では人口や交通の便、地域の住民の特性などの状況がかなり異なります。例えば、東京都美術館の場合はアート・コミュニケータが上野駅まで参加者を迎えに行き、美術館まで同行サポートをする場合があるのですが、長野県では、参加者の多くは車で来館します。このような条件

の違いにどのように対応していくかを考える必要がありました。特に、当館は出入口が全部で7カ所あるので、駐車場をどこにして、どの出入口から入っていただくのか、バスや徒歩で来館する方はどうするのか、特別鑑賞日は休館日に実施するので参加対象者ではない方が誤って入ってしまわないようにするにはどうすればよいのかなど、導線についてはかなりいろいろと検討しました。

そして、館のリニューアル前からつながりのある障害のある方や、建て替えにあたってのヒアリングに協力してくださった県の視覚障害者協会や身体障害者協会の方など約30名を招待し、試験的に特別鑑賞日のプレ開催をすることにしました。施設面や対応についての意見を出していただき、問題点を洗い出していきました。

事業実施前には、職員全員（学芸員、総務等の事務方はもちろん、館長、副館長も対象）に対してインクルーシブ研修を行いました。この研修は毎年、講師を変えて実施しています。講師には県内の視覚障害のある方や聴覚障害の方、県の障害者支援課の方などをお呼びしています。

また、休館日に実施するので、監視員などの人数を減らし、学芸員も含めた職員に、会場の監視や受付等に立ってもらうことにしています。そのため毎回、どこにどのような貼り紙をするか、このポジションでは何をするか、エレベーター前やギャラリートークではどのような点に配慮するかなどをまとめた十数ページのマニュアルを作っています。

職員や参加者の反応にはどのようなものがありますか。

実施後には、参加者だけでなく職員にもアンケート調査を行っています。当初は「教育普及のスタッフだけで実施すればよいのでは」という意見もありましたが、回を重ねるごとに意義が理解されるようになり、今年度は否定的な意見は見られませんでした。今年度はマニュアルを渡す前から、自発的に

「障がいのある方のための特別鑑賞日」の様子

準備に動いてくれる職員がいたのが嬉しかったですね。

参加者からは「逆差別ではないか」「普通の日には来るなということか」という意見が出ることがあります。もちろんそんなことは全くありませんし、広報の際も慎重に説明しているのですが。ただ、車椅子で来られている方々からは、「普通の日にも来られるが、ゆっくり見ていると他の人の邪魔になると思うので、この日に来ている」という声が多いです。特別鑑賞日のほうが来やすい方は一定数いるということは、東京都美術館の視察の際にも伺いました。

特別支援学校および学級を対象とした出張講座／館内での鑑賞プログラム

プログラムの企画・実施の経緯をお聞かせください。

休館中にこれまでの教育普及事業を全て整理した際、一般学校団体の来館時に職員がついてガイドをするのをやめ、希望する学校には入館前に簡単な施設や展覧会の説明をする10分レクチャーを行うことにしました。年間約150校が来館するので、全てに対応すると他の業務への影響が大きいこと、また、児童生徒を教えるのは先生の仕事だと考えたからです。その代わりに、美術館では先生を対象とした研修プログラムや、美術館の楽しみ方に関する事前学習アニメーション、鑑賞をサポートするワークシートなどのツールを用意し、来館前に担当の先生と鑑賞方法についての打合せを必ず行うことにしました。一方、来館自体にハードルがある特別支援学校・学級に対しては、スタッフによる館内での鑑賞サポートを残す判断をしました。

また、一般学校対象のプログラムを減らした代わりとして、特別支援学校・学級への出張講座を充実させることにしました。信州大学附属病院と長野県立こども病院の院内学級への出張講座も、従来通り実施しています。

出張講座を行う際、どのような工夫をしていますか。

事前に1～2回の綿密な打合せと、現場の下見を必ず行っています。特別支援学校からは何かをつくりたいという依頼を受けることが多いのですが、その場合は特に、参加する全ての児童生徒の特性を聞くようにしています。できることはもちろん、苦手なこと、してはいけないことも聞きます。特定の色が苦手だという子がいれば、その日に着る服装にも気をつけ、キラキラしたものが好きな子だと聞けば、気を取られないようにアクセサリーは全て外すようにしています。それは、何より場づくりを大切にしたいと考えているためです。子どもたちが制作を楽しめる場をつくるのは当たり前ですが、それ以外に気になる要素は全て排除することを意識しています。ただ、それは一般の子ども向けプログラムのときも同じで、プログラム以外の要素に意識が向けられないようにしています。

現場の下見では、プログラムができる広さとして、収容人数の倍程度の空間があるかを確認します。スペースに余裕がないとスタッフの動線に制限が生じたり、ストレッチャーなどが入らなかったりすることがあるので、学校側に広い会場への変更をお願いすることもあります。

また、どうしたら情報が相手に届くかということを意識し、教育普及に関しては対象ごとに多種類の印刷物を作成しています。今年度は新たに、特別支援学校の先生に向けたスクールプログラムのチラシもつくりました。学校に送付すると現場の先生の手元に情報が渡らないケースがあるため、特別支援学校の教員の人数分、学校に配布して、確実に各人に届くようにしています。「チラシが手元に届いたので」という相談の電話をたくさんいただき、効果を感じています。

鑑賞プログラムに参加する学校の先生方には、もっとうまく美術館を使ってください、図工のネタを探すときなど、ぜひ専門家を頼ってください、とお伝えしています。相談があれば、参加する児童生徒の特性を聞きながら、学校ごとに合わせたプログラムを提案します。

なお、対象ごとの広報は、アート・コミュニケータの募集などでも意識して行っています。たとえば、自動車通勤をする30～50代に向けては FM ラジオで、農作業をする高齢者層に向けては AM ラジオで広告するなど、情報を届けたい相手や地域に適した媒体を選んで、効果的に情報を届けるようにしています。

「みる」を考える－見えない人と見える人が一緒にみるために

プログラムを企画された経緯をお聞かせください。

もともと信濃美術館が「触れる美術展」を2015年度から毎年度開催していたこと、それから、これまで障害のある方に対するプログラムは学校関係を対象にしたものが多く、そうでない方を対象としたものを考えたいという思いがありました。視覚障害者コミュニティの方から「誰かと一緒に喋りながら展示室で見たい」という話を聞いたり、特別鑑賞日に「(学芸員である) あなたと一緒に見ると面白い」と言っていただいたりしたことも、始めるきっかけとなりました。

まずは視覚障害者と美術を楽しむための研究や実践をしている研究者を講師に迎え、その先生と視覚障害者コミュニティの方と私で、どのようなことをしたいか、どのようなことならできるかを話し合いました。見えない方からはまず「触りたい」という希望が出てきますが、当館のルールでは通常のコレクションに触ることはできません。そのため、見える人、見えない人、見えづらい人を対象に、展示室で目の前にある作品についての対話を通して、見えない人・見えづらい人に作品のイメージを形づくってもらうプログラムとすることにしました。

実際にはどのようなことをするのですか。

視覚障害のある方1人と複数の見える人がグループになって話しながら鑑賞し、見える参加者には、見えない人が頭の中で作品を構築する手助けをしてもらいます。見える人と見えない人を1対1にせず、2人以上の見える人と組んでもらいます。見える人も人によって見え方が違うということを前提としているからです。例えば、描かれている人物が何を考えているかは、見る人の数だけ感じ方がありますよね。表情を見て「笑っているんじゃない?」「いや、怒ってるよ」などと話し合っていると、見えない人は、どこからそれを判断しているんだろう、どんな口元なんだろう、などと考えるでしょう。そのような会話から、実際には見えなくても、どんどんイメージができていきます。

同時に、見える人にも相手の見え方と自分の見え方が違うことを実感してほしいという意図もあります。京都国立近代美術館の「感覚をひらく」のワークショップで私が受けた衝撃を、皆さんにも体験してほしいためです。当館は「インクルーシブ・プロジェクト」として、障害者に対してではなく、“誰にでも”開かれた美術館であることを謳っています。アートの前では障害のある人もない人も一緒であると考えているからです。

実施時に工夫していること、意識していることは何ですか。

視覚障害と一言で言っても、見えない人の見え方もそれぞれ違います。そのため講師とも話し合い、鑑賞を始める前に、相手の見え方をどのように確認するかのデモンストレーションを行っています。私たちも友達同士で「眼鏡はいつからかけているの?」「眼鏡を外すとどのくらい見える?」などと話すことがあると思いますが、「○○さんっていつから見えないか、聞いていいですか?」「光っているのはわかりますか?」など、聞いてよいという方には確認していきます。これまでの参加者には、「赤色だけはわかる」「影が動いているのはわかる」「何歳までは見えていたから何となく色の感覚はある」という方々がいました。視覚障害者とひとくくりにすると、その先の対話による鑑賞に進めなくなるので、どのような見え方なのか、目の前にある作品は見えているのかなどを聞き、それを踏まえて、作品についてどのように説明するかを考えていくことになります。

「『みる』を考える－見えない人と見える人が一緒にみるために」の様子

小規模館ではどのように インクルーシブな取組を進めていけばよいか、アドバイスをお願いします。

当館で職員全員がインクルーシブ研修や特別鑑賞日に参加するシステムをつくれたのも、インクルーシブな取組が県の方針として明らかにされていたからです。美術館が社会教育施設として地域の核になるには、そのための材料となるプログラムを行ってこそ美術館の存在意義があるということを、館の共通認識として持つ必要があります。

ただ、私も以前は小規模館にいたのですが、学芸員が1～2人しかいない館では、予算的にもマンパワー的にもできることは限られます。しかし、インクルーシブであるために重要なのは、「誰でも美術館に来てほしい」という本来当たり前の姿勢を積極的に示すことであり、わざわざイベントを実施する必要はないと思うのです。小規模館にもできることはたくさんあります。たとえば、高齢の方や弱視の方のために、パンフレットをコピー用紙に拡大文字で印刷しておく。あるいは、外国人のために翻訳するのもそうですが、漢字を読めない人が来るかもしれないので、漢字にはふりがなを振っておく、などです。その地域やコミュニティを構成する人の多様さを知ることで、その人に何を届けたいか、そのための方法が何であるかは考えられると思います。そこから、配布物や広報の方法などを変えていくことはできるでしょう。

まずは、「美術館は誰でも楽しめる場所である」ということを伝えること。そして、相手を知り、相手に合わせ情報を届けること。まずはその2つを進めることが大切ではないかと思います。